

一人一人の児童が自信を持って 楽しく活動できる音楽の授業

— 子供たちの中にいきる音楽を目指して —

足利市立柳原小学校 阿久津 浩 久

1. はじめに

本校は、平成6年度、平成7年度と市教委指定の研究学校として、新しい学力観に立った授業改善を目指してきた。「一人一人が学ぶ力を付ける学習過程の在り方」という主題を掲げ、配当時数の多い国語、算数を、過去の研究を生かすよう音楽を主たる研究教科として取り組んできた。研究の指針として、

○学校教育目標の「よく考える子」を基に、学習の主体が児童であることを確認し、自らが課題を見つけ、主体的に考えたり、判断したり、表現したりして、よりよく解決することができる力を育てる授業づくりをする

○教師・児童の実態から教師主導型の授業の脱却をはかり、児童自らの能力を基本とする学力観に立った教育を目指す

○教育の今日的課題から、基礎・基本を重視し、個性を生かす教育の充実に努め、変化の激しい現代社会に主体的に対応することができる能力の育成をはかる

ことを取り上げ、

◇教材研究の充実

◇授業実践の重視

◇学級経営の充実

を具体的な内容として、研究を進めた。

この中で、我がクラスでは音楽科において、いかに子供たちが主体的に音楽に取り組めるような授業を展開するか、いかに子供達が音楽への抵抗がなく、むしろ楽しんで活動することができるか、そして（勉強としてでなく）いかに子供たちと音楽との距離を近づけるか、ということを経験の実態や研究との関わり、また音楽における自分自身の考えを基に、実践し、その反省を次の実践に生かしてきた。

2. 関連した研究内容について

ここでは、本研究での音楽科における基本的な学習過程について述べることにする。次のページのもはその基本的な学習過程表である。本研究では1単位時間を基本的に4つの段階に分けて考えている。音楽では「つかむ」「あらかず」「ねりあげる」「まとめる」としているが、国語、算数は明確に4分化されているのに対し、音楽は第2段階の「あらかず」と第3段階の「ねりあげる」を明確に区別していない。これは、児童一人一人の感性や思いを大切にしたいと考え、それぞれのペースにあわせた学習活動ができるように考慮したためである。個人が自分の思いに沿って音楽活動を行う（あらかず）中で、個人の深まり（ねりあげ）が行われるからである。

音楽科の基本的な学習過程

	児 童 の 活 動	教 師 の 支 援
つ か む	<p>○既習曲を歌う。</p> <p>○音遊びをする。 ●リズムリレー・リズム問答・音あて遊び</p> <p>○課題をつかむ。 ●範唱（奏）を聴く。 ●イメージを広げる。 ●見通しを立てる。</p>	<p>○子供たちがのびのびと表現できる雰囲気をつくる。 ●歌う場所や形態を工夫する。 ●自ら表情豊かに歌ったり身体表現したりする。</p> <p>○楽しみながら活動できるようにする。</p> <p>○あこがれを持てるように曲の提示の仕方を工夫する。 ●映像・範唱・範奏</p>
あ ら わ す ／	<p>○自分なりの表現の仕方を工夫する。 ●自分の好きな音をつくる。 ●自分の気持ちにあった音色や音量、速度などを工夫する。 ●身体表現を工夫する。 ●表現の広がりを楽しむ。</p> <p>(合奏・合唱の場合)</p> <p>○一人一人の表現の工夫のよさを感じ取ってグループの表現の仕方を考える。</p>	<p>○子供が、自分の考えたことや感じたことを思い通り表現できるように助言する。 ●楽器の奏法 ●発声の仕方</p> <p>○一人一人をよく観察し、変容した点やつまずいている点について励ます。</p>
ね り あ げ る	<p>○友達表現のよさに共感したり、それを認めたりする。</p> <p>○自分の表現をさらによいものにするように工夫する。 ●速度・強弱 ●曲の山のとらえかた</p> <p>○グループの表現をさらによいものにするように工夫する。</p>	<p>○よく聴きあえるように学習場所や形態を工夫する。 ●活動スペースの確保 ●録音</p> <p>○ねりあげる視点を与える。</p> <p>○自分たちの演奏を客観的に聴くことができるように録音機器を用意する。</p>
ま と め る	<p>○学習のまとめをする。 ●発表する。 ●自己評価をする。 ●相互評価をする。</p> <p>○次時への課題をもつ。</p>	<p>○子供の発表を称賛し、励ます。</p> <p>○自分の学習の状況に自ら気付くように評価カードを工夫する。</p> <p>○他の人（グループ）のよさに気付き、それを自分の学習に活かして広がりのある活動をするように助言する。</p> <p>○努力を讃え次時への意欲づけをする。</p>

3. 児童の実態

現在のクラスは、4月に新しく受け持ったクラスである。そこで、子供たちの実態を捉えることから始めた。今までの研究から出されている、本校の児童の実態とあわせて考えてみると、

- ・男女の仲が良く、協力的である。
- ・よりよいものを求めたり、深めたりしようとしなない。
- ・自分の考えが出せない。

などがあげられる。また、音楽に関する実態をあげてみると、歌うことや楽器を演奏したりすることが好きで、授業以外にも全校音楽集会や朝の会、帰りの会の歌など大変意欲的に取り組んでいる。歌唱表現や、国語の音読など、自分たちの考えを表現活動に取り入れようとするには大変興味を持って活動している。しかし、思うように活動するための表現力が身についておらず、そのために活動意欲を失ってしまうような児童もいる。このような実態から、次のような実践を行った。

4. 実践の内容

三つの授業の実践経過

(1) 「ようすを思い浮かべて」8時間扱い

(教材研究)

ここでは、歌うことは好むが、表現力に乏しいという児童の実態をふまえ、教材の特質を生かして表現力を育てるための指導計画を立てた。右はその指導計画である。

「山の朝」は、高音から低音までの幅の広い音域を生かして、表現の土台となる発声面の技術指導を計画した。同時に、曲が容易で、情景をとらえやすいことから、歌い方の工夫の仕方をつかむ場を取り入れた。発声指導といっても一度ですべてできるわけではなく、姿勢、呼吸法など、基本にとどまったが、頭声的発声の感覚をつかませると、見よう見まねでとらえていた児童もいた。

「白鳥」は、旋律の表す情景がとらえやすいことから、まず、題名を教えずに、曲だけを聴かせ、音楽的感性を研ぎすますよう計画した。その後題名を教え、情景を考えながら旋律や音色の美しさを感じとり、作曲者の工夫をとらえることで、表現の工夫の幅を広げようと考えた。

また、一人一人が感じた表現をみんなで認めあい、個人の音楽的感性に自信を持たせようと考えた。子供たちは、白鳥のほかにラッコの寝ている様子など、自由なイメージを持ったようだったが、ほとんどの者が曲の感じをとらえている様子だった。

(本時の様子)

「まきばの朝」では、前時までの「山の朝」「白鳥」で学習した情景にあった歌い方の工夫の仕方を踏

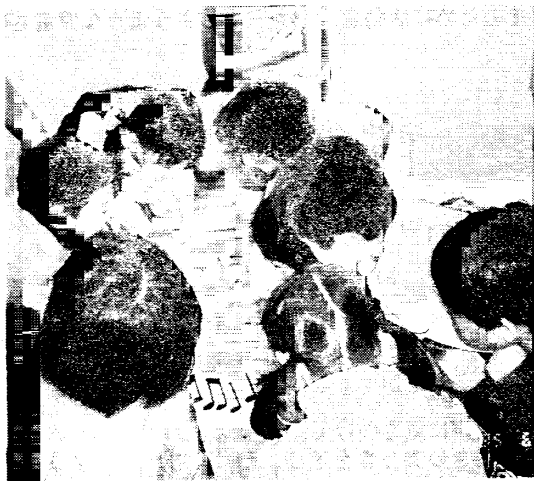
指導計画1

時	ね ら い	教材	主な学習活動
1	曲想や情景を感じとり、歌い方の工夫をすることができる。	山の朝	・歌詞を読みとり、その表す情景にふさわしい歌い方を考える。
2	発声に気をつけて、響きの美しさを感じることができる。		・響きの美しさを感じとりそれを生かすような声の出し方を工夫する。
3	曲想や情景を想像しながら旋律や音色の美しさを感じとることができる。	白鳥	・情景を思い浮かべて演奏を聴き、工夫している点を話し合う。
4	歌詞の内容を理解しフレーズを大切にしてい歌うことができる。	まきばの朝	・歌詞を朗読したり、階名唱、歌詞唱して情景をとらえる。
5	歌詞や旋律の特徴を感じとり、表現の工夫をしようとする。		・歌詞や旋律から、自分なりに工夫したい点を書き入れる。
6	よりよい曲想表現を工夫して、それを表現しようとする。	まきばの朝	・グループで、楽譜に曲想表現を書き入れる。 ・歌い方の練習をする。
7	協力して、自分たちのねらいに沿った表現の工夫ができる。		・自分たちの歌を録音し聴き直して、歌い方の練習をする。
8	情景を想像しながら表情豊かに歌うことができる。		・グループごとに発表しお互いに聴き合う。

まえて個人で工夫を考え、グループで一つの楽譜を作り上げていった。歌詞の内容や、写真でとらえたイメージ、旋律の特徴などから個人で考えた工夫を出しあい、検討しながら記号のない楽譜に歌い方の工夫を書き入れていった。同時に、「山の朝」での発声指導を元に、聞き手を決め、考えた通りに歌えるよう練習を進めねりあげを図った。

〈考 察〉

「音楽に対する一人一人の感じ方は自由であること」「それによって音楽は作られること」をとらえさせたせいか、自分の考えを積極的に出す様子が見られた。また、出された考えをグループの中で整理していき、最初



の意見がよりよいものとなる「深まり」も見られた。練習においても、技術面以外の自分たちで判断できる声質やブレスなどは、聞き手を中心に練り上げられたところもあった。

表現の工夫をするということで、楽譜や作業プリント上での話し合いは持つことができたが、肝心の音がほとんどない授業であった。また、話し合いのグループの中では、音楽的に能力の高い者が話し合いの主導権を握ってしまうところもあり、全員が主体的な音楽活動をしていたとはいえなかった。

(2) 「ひょうしを感じて」7時間扱い

〈教材研究〉

この単元に入る前に簡単な調査をしてみたところ、

- ・知っている楽器が少ない。
- ・記譜に関する音符、記号などの知識が乏しい。

という実態もあげられた。そこで指導計画を立てる段階で、子供主体の活動をする場である本時(3/7)の「リズムづくり」の前に、楽器の紹介と音符、記号に関する学習の場(基礎基本を身につける場)を位置づけた。

〈本時の様子〉

本時の展開では、前回の課題である

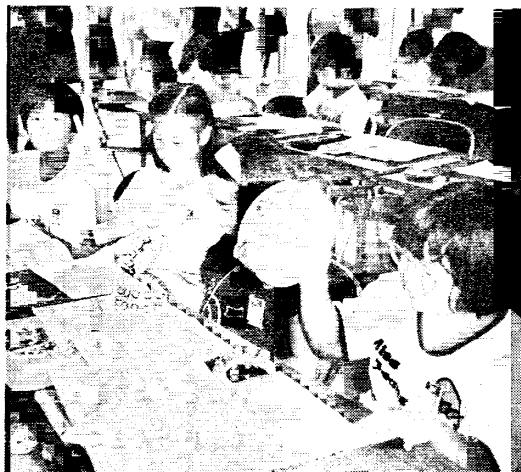
- ・能力に応じて、主体的な学習活動が行えるようにすること
- ・音のある授業であること

を考慮した。学習過程の第2段階(あらわす)において、個人、グループなどというように学習形態を統一せず、児童一人一人のすすみ具合や、能力にあわせて、一人で考えたり、友達と協力したり、比べたりという自由な形を持たせた。教師の支援も、一様にリズムづくりのアドバイスをするだけでなく、できあがったものを代わりに演奏してあげたりするなど教師の能力を児童一人一人の学習に最大限に生かせる

よう支援をした。

〈考 察〉

能力の高い者はいくつものリズム伴奏を作り上げていたし、友達と協力して作り上げている者もいた。また、自分で考えることはできたが、演奏できない者は、できる子や教師に代わりに演奏してもらって確かめていることもあった。記譜に関しても友達同士で助け合う場面が見られるなど、お互いに不得手な部分を補って、みんなが楽しめるような音楽の授業ができた。子供たちは、自分の進捗度ではあるが、熱心



に音楽に取り組んでいた。

また、教室内に様々な楽器を配置し、子供たちが自由に使えるようにすることで、音のある授業をねらったが、やはり記譜したり、頭で考えてしまうことが多く、思ったほど効果はなかった。

単元が終わって考察してみると、音符や記号など知識的なものや、リズム打ちなどの演奏技術などは、すぐには身に付かなかった。音楽を行うに際して必要不可欠なものであるが故に、計画的、段階的な指導計画の検討が必要なことを実感した。

(3)「ふしを重ねて」8時間扱い

〈教材研究〉

今回指導計画の導入に鑑賞教材である「きゅう友」を持ってきた。「聴くこと」から入ることで、2つの節の重なりや音の重なりをとらえやすくし、少しでも関心を高めようと考えたからである。

「地球はぼくのにわ」では、和声が同じでタイプの違うフレーズを利用して、実際に自分たちで簡単な音の重なるの世界を体験させたいと考えた。

「もみじ」は、ポピュラーながら対位的な音の重なりと和声的な音の重なるの美しさを感じさせる2部合唱である。なじみ深いこの曲が2部合唱になることで、新しい発見と感動があり、曲想や情景による表現の工夫も取り入れながら本格的な和声の響きを作り上げることで、より深い音楽の世界をつかむことができるのでは、と考えた。

「雨の公園」では、リコーダーの高音の練習も兼ねて二重奏をすることで、歌唱では難しい響き合いを感じながら演奏する喜びを味わわせようとした。

〈本時の様子〉

学習形態については、「個人差」の問題を配慮し、グループの人数を決めず、自分の能力を考えてメンバーを編成するようにした。音楽的に経験の深い児童は、2人でも十分だし、逆に浅い児童は、多くの友達と協力していくことで学習が成立していくと考えた。

また、少人数のグループ活動を基本とした。大勢で、1つの作品を作り上げようとする、どうしても意見が取り上げられずに終わってしまう子供もでてしまうからである。各自の思いが反映されるような環境の必要性を考え、多くても6～7人のグループとした。

学習空間については、狭いと隣のグループの音が活動の妨げになってしまうことを考え、教室を2つ用意した。また、片方の教室には、いつも「もみじ」の伴奏が流れているようにし、音のある音楽の授業づくりに努めた。

本時の展開において「あらかず／ねりあげるの段階」では、子供たちが自由に活動できる時間を多く確

指導計画2

時	ねらい	教材	主な学習活動
1	二つのふしの重なり に気づき、音の重なり に関心を持つ。	きゅう友	・曲を聴き、二つのふしの 重なりをとらえる。 ・音の重なりによる、響き の深まりをとらえる。
2	曲の感じをとらえて 歌うことができる。	地球は ほくの にわ	・曲に乗って歌い、 <u>ア</u> と <u>イ</u> の歌い方を話し合う。 ・リコーダーの練習をする。
3	二つのパートの特徴 をとらえ、組み合わせ て演奏の工夫をす ることができる。		・ <u>ア</u> と <u>イ</u> の曲想の特徴を知 り、演奏形式や、組み合 わせ方を工夫して演奏す る。
4	情景を想像しながら 楽しんで歌うことが できる。	も み じ	・歌詞の内容を理解する。 ・情景をとらえて歌い、歌 い方の工夫を考える。
5	低声部を練習し、二 部合唱による音の重 なりを味わう。		・低声部を練習し、2部合 唱をする。歌い方を考え グループで話し合う。
6 本時	ハーモニーを考えた 歌い方の工夫をす る。		・考えた工夫を元にグルー プで練習をする。お互い のグループを見学しあう。
7	グループごとの工夫 を認めあうことが できる。		・グループごとに発表し、 工夫した点や発表での良 い点を話し合う。
8	リコーダーの高音の 出し方を知り、曲想 を考えながら演奏す ることができる。	雨の 公園	・練習曲を元に、高いミ・ ファ・ソの練習をする。 ・曲想を考えた音の出し方 を工夫し、響きを味わう。

保することで、一人一人（小グループ）のペースで学習を進められるようにした。また、子供たち同士「学び合い」にも視点を当て、「見学タイム」を設けた。

「まとめるの段階」では、教材「もみじ」についての学習計画を一覧にした「学習カード」に自己評価を書いていくことで、常に本時の位置づけがわかり、次時の目当てがとらえられるようにした。

〈考察〉

少人数にしたグループ編成によって、子供たちは、一人一人責任を感じていたようだった。自分がきちんとやらないと、ハーモニーをねらっている今回の学習が成り立たないことをよく感じていた。

歌い方の工夫にしても、ほとんどの児童が自信を持って自分の意見を持ち、グループの中へ反映させていた。「まとめ」でのグループごとの発表において、大勢の参観者がいた中で、2人だけのグループが堂々と合唱（重唱）していたこともその表れであろう。

うまく合唱ができなかった者も、「見学タイム」で他のグループの良いところを見つけることができたようで、それぞれが自分の能力なりに45分間音楽活動をする事ができた。

☆ 見学カード ☆

4年1組

自分たちの見学タイム 時 分から 時 分まで

♪ 友達のグループのよいところを見つけて学ぼう♪

班または名前	よがったところ、まねしたいと思つたところなど・・・
9班	下モニイ7 歌、7ある位、声の大きさ が 26-17-11
2班	声をなめ々に出して、アとアをきれり、
9班	強弱が、は、きりける

音楽学習カード

4年1組

「もみじ」(ハーモニーを考えた歌い方の工夫しよう)

目	め 目 的	反省 ORENJYO	どんなところか?
1	・景色を覚えて楽しく歌おう ・歌詞やメロディーから歌い方を考えよう	よくできた がんばった	景色の考えて楽しく 歌ったところか
2	・下のパートを練習して2部合唱しよう ・グループを作ろう	よくできた がんばった	高くとか ひくとか
3	・ハーモニーを考えた歌い方の工夫しよう ・友達のよいところを見つけよう	よくできた がんばった	おんなどかをおかせて かばった
4	・自分たちの工夫がわかるように発表しよう	よくできた がんばった	2回目、1回目よりよく できたと思う。

本時の展開

学習過程	学習活動	時間	形態	教師の支	授	評価
つかむ	<p>1. 「もみじ」や愛唱歌を歌う。</p> <p>2. 学習のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">ハーモニーを考えたい歌の工夫しよう</div>	5	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・発声練習をし、「もみじ」を歌い、音楽的雰囲気をつくる。 ・どのような手順でどのように進めていくかをきちんと把握できるように本時の活動やめあてを確認する。 		<p>〔関〕積極的に声を出して、歌おうとしているか。(観察)</p>
あらかわす	<p>3. ○前時までに考えた曲想からの工夫と二部合唱としての工夫をふまえグループでの歌の工夫を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お互いの意見を尊重して、取り入れていく。 ・話し合いだけでなく実際に歌ってみながらも考えていく。 ・話し合ったことがわかるように、楽譜に書き込んでいく。 		グ	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの構成について確認をする。 ◎意見が重なった場合、それぞれの意見を尊重できるように助言する。 ・考えの浮かばない部分については、歌詞の内容や旋律の特徴から考えるよう助言する。 ・自分たちの思いを視覚的にとらえられるように、拡大楽譜を用意する。 		<p>〔工〕曲のイメージや二声のバランスを考えた歌の工夫ができたか。(作業用紙)</p>
ねりあ	<p>4. ○自分たちの歌の工夫が表現できるように練習する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・順番に聞き手を決め、意見を出しながら進める。 ・注意する点、途中で気付いた点、思いついた点はその都度、楽譜に書き入れる。 ・自分たちでできる限りは、発声面についても注意していく。(声質・発音・ブレス等) ○他のグループの見学をし、工夫している点や、参考になる点を見つける。 ・良い点を見つけたら、カードに記入しておく。 	30	1 ブ	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループに音が取れるような楽器を持たせる。 ・会場の一部で、伴奏を流しておく、自由にあわせできるようにしておく。 ・事前に指導した、発声面における注意事項を掲示しておく、確認できるようにしておく。 ・グループを回り、工夫したところを生かせるような発声ににおける指導や助言をする。 ・時間を割り振って他のグループを見学する時間を取り、お互いの良い点を学び合う場を設ける。 ・グループ同士で聴き合ってもよいことを伝える。 		<p>〔関〕進んで意見を発表し、意欲的に曲想表現の工夫をしようとしているか。(観察)</p> <p>〔鑑〕他のグループの様子を聴いて、工夫している点や、自分たちに生かせるようなところを見つけたか。(作業用紙)</p>
まとめ	<p>5. いくつかのグループの発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最後まで終わらなくても練習のポイントを示し、その成果を発表する。 <p>6. 今日学習をふりかえり、学習カードに反省を書く。</p> <p>7. 次回の学習活動を確認する。</p>	10	一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・グループが力を入れた部分を聴く観点として示す。(OHPでの提示) ・本時のめあてが達成されたか自己評価をし、次時の学習活動を連絡することによって、意欲の継続をはかりたい。 		<p>〔鑑〕聴く観点に注意して発表を聞くことができたか。(感想・意見)</p>

教育祭学校音楽祭への参加

今回の授業の素地作りとして、10月11日の学校音楽祭に出演した。アカペラ（無伴奏）と伴奏付きの2曲の2部合唱をやった。これまでに2度の音楽の研究授業をこなしていたので、子供たちにも少しずつ音楽への自信があったようだ。彼らは、自分たちの意志で2曲を選んだ。最初は私の中で「この曲は無理ではないか」という懸念があった。しかし、子供達の意志に沿って音取りの手助けをしていった。一日目、3小節しか進まない。しかも、アカペラの方の曲は、簡単なポリフォニーなので各パート単独では、単調な曲である。音取りを進めるうち徐々に意欲がなくなっていった。「やはり・・・」と思ったが、しかし、子供達も自分たちで選んだプライドがあるのか根をあげる者もなく、五日目、何と音を取り終えた。そして、2つのパートを初めて合わせたとき「この曲ってこんなにきれいな曲だったの?」「1パートで歌っているのと全然違う曲みたい。」という声があがった。「ふしを重ねて」の授業が11月9日であったが、一足先に子供たちは音の重なりを味わい、その美しさ、豊かさを感じていたようだった。



5. 成果と課題

今回の実践による成果としては、

- ・子供の側に立った、単元レベルでの教材研究が重要であることを実感した。（教師）
- ・設定された〔児童の主体的な活動の場〕において「自分たちでできる（やろう）」という意識（自信）が見られるようになってきた。（児童）
- ・子供たちが音楽を身近なものとして楽しめるようになってきた。（児童）

ことがあげられる。単元全体での子供の活動の場を見極め、決して放任ではなく一人一人の「個」を見つめながら、それらに対応できる柔軟な展開を設定していくことで、子供たちは自分なりの考え、レベル、方法で有意義な学習活動をすることができた。このことで、自分の考えに自信を持てるようになった。学芸会では、4年生ながら自分たちで台本を作り、演出、衣装を考えることができた。（私は、演技指導と台本のワープロ打ちだけである。）

この自信が音楽的感性を高める礎にもなった。朝の歌、帰りの歌で今までは後奏があるうちにバタバタと騒ぎ出していたが、いつの間にか片づけることをしなくなり、音が終わるまで耳を傾けるようになっていた。「静寂を感じるができる者は、音楽を知る者である」の言葉通り、子供たちの音楽的感性は確実に育っているようである。

また、本校の基本的な学習過程の流れが身に付きつつあることで、児童主体の授業展開に抵抗なく取り組めるようになってきた。自分の持っている考えに自信を持ち、自らが問題解決の見通しを立てて自分の持っているものを基に学習活動をおこなうことができる姿は、まさに本校の研究の求める「学ぶ力」そのものである。音楽に限らず他教科でもその成果は見られる。国語の説明文は、1学期に1単元あり、そのときに一通りの読む手順を学習してきた。2学期の説明文ではそのときの学習を基に、個人で要点を読みとり、グループで合わせ、意味段落を個人で考え、その後グループで考え、全体の要旨を個人で考え、グループで確認し・・・と進んでいくのだが、個別学習とグループ学習の時間を設定しようとする時、子供たちから「もう少し一人でや

りたい」とか「はやくまとまったので、早速グループで確認したい」という声が出てきた。そこで、進み具合を見ながら、グループごとに学習形態を変えていくようにした。本校の研究では、国語科においては4つの学習過程を一斉に分けてとらえてきたが、音楽のように第2段階と第3段階を組み合わせるとさらに能率的な形に発展させることもできた。子供たちは、自分たちにあった時間配分で活動できたので、大変主体的に学習できたようだった。

一方、今後の課題としては、

- ・学年があがるに従って広がる個人差（技能面）をどう補っていくか。
- ・子供の「学ぶ意欲」をどう評価していくか。

ということがあげられる。楽器演奏、歌唱のどちらにおいても一朝一夕で身に付くものではない。年間又は複数年にわたる指導計画の作成が必要となってくるだろう。評価の問題については、本校の研究の次の課題としても挙げられている大きなものであるため、それと合わせてさらに研究していきたい。

6. お わ り に

音楽が存在する芸術という世界には頂上はない。また、一人一人の感性には上下はなく、全く自由であると思う。だから教科・学習としての存在というのが難しく感じるのかもしれない。しかし、私たちの生活から音楽を切り離すことはできない。子供たちにとって言葉と同じように音楽も一生つきあっていくものなのである。だから、私は、音楽を強制的に教えこもうとは思わない。彼らにとって人生はまだ始まったばかりなのだから、これからずっとつきあっていくものの「よさ」「すばらしさ」を伝えてあげられればいいのではないだろうか。いい音楽に出会い、あこがれることで、彼らと音楽とのこれからのつきあいはどんどん深まっていくのではないだろうか。

評

学校の音楽は、本来、言いたいことや心の中にあるイメージを音や音楽を通して表現する芸術であり児童の内発的な意欲を高めて表現する教科です。したがって、音楽の学習は子供の「思い」や「考え」を重視し、音楽を愛好することのできる能力や心情の素地が育つように、また、個性が発揮できるように、児童の側に立った学習指導の工夫が求められています。そのためには、活動のめあてや目標のもたせ方、児童の興味・関心の把握と生かし方、系統性を押さえた学習内容の構成、多様な学習活動、学習形態の工夫等、具体的な実践の積み重ねが大切です。

本研究は、まさに、このような課題を受けての研究と受け止めることができます。また、柳原小学校の研究テーマ「一人一人の児童が学ぶ力をつける学習過程の在り方」(市指定研究学校「学習指導の改善」)によって実践されたものであります。本研究の特色としては次のようなことがあげられます。

- 1 主体的に音楽に取り組めるような授業を展開し、子供達が音楽に抵抗なく取り組み、楽しんで活動できるように、音楽科として1単位時間の基本的な学習過程を子供の感性や思いを大切に設定したこと。
- 2 子供の側に立って単元レベルでの教材研究を深め、児童の主体的な活動の場を学習過程に位置付けて、自分の思いやイメージ、考えを自由に表現する活動を重視したこと。
- 3 音楽の授業で学習したことを、教育祭の学校音楽祭への参加という機会を発表の場としてとらえ子供達に目標を明確にもたせたこと。また、そのことを通して、自分達で曲を決めたり、練習したりして、音の重なり合いの美しさや豊かさを児童自らが感じとれる場として考えたこと。

このような実践を通して「児童一人一人の感性には上下はなく、全く自由である。」ということを実感としてとらえる教師の感性は、実践された教師のみが身に付けることができる財宝であると思われます。また、音楽の授業で磨かれた子供達の感性は、今後いい音楽に出会い、これからの音楽との付き合いが深まるものと確信しております。

本研究の内容は、今後の授業の展開や発表の場の工夫・活用、教材研究と学習過程の在り方を考えていくうえで、小学校の音楽を担当される先生のみならず、小・中学校の先生方にとっても大いに参考になるものと思われます。

本研究をお寄せ下さった阿久津先生のご努力に感謝を申し上げ、今後とも継続して実践を積み上げ、研究が更に深められますよう期待して評いたします。